



すこやかいご

Ishikawa

地域の介護応援プロジェクト

～在宅介護の負担軽減セミナー～

石川県内の介護にかかわる人たちを応援する、「すこやかいごプロジェクト」の第1回事業「在宅介護の負担軽減セミナー」は6月7日、金沢市の北國新聞20階ホールで開かれ、参加者約210人が講演やパネルディスカッションを通して、望ましい介護の在り方を考えました。プロジェクトは今後、さまざまな催しを通して、介護の負担を軽くするための工夫を提案していきます。

主催:北國新聞社

特別協力:花王株式会社

気軽に頼れる環境が大切

和角孝男氏



【パネリスト】
鍋谷 晴子氏
 石川県ホームヘルパー協議会会長、全国ホームヘルパー協議会副会長、介護福祉士、金沢春日ケアセンターヘルパーステーション管理者

藤井 正彦氏
 花王株式会社フラッグシップ&ホームケア事業ユニットシニアマーケット

和角 孝男氏
 介護経験者、金沢市在住

【コーディネーター】
原田 幸子氏
 フリーアナウンサー

【パネルディスカッション】私にできること、家族にできること

藤井正彦氏



声交わすのも有効

は商品開発しています。

鍋谷 介護は腰を痛めやすいと思われがちですが、例えば自分はどう寝返りしているかを考えると、体の動かし方が分かりますから、無理な力を掛けずにできます。される側も無理やりという感じがな

きも、皆さんの連携プレーに感心しました。
鍋谷 家族つて、感情がストレートにぶつかる部分がありますよね。ですから、家族としてできることは家族がやり、他の人でもできることは近所の人や介護のプロにお願いして任せることで、バランスを保つことが大切です。

原田 いざ介護が必要になったとき、助けをどう求めていくか、語り合える環境が必要ですね。一人一人が明日はわが身と考えて、互いに支えていくことが大事ですね。

《最初に和角さんが、今年4月に逝去した母親を家族で介護した体験を話しました》
原田 和角さんは医師や親類、ケアマネジャーと相談したり、インターネットで情報を探したりして、何かお母様に大切なのかを判断されたのですね。
鍋谷 先ほど触れたように、ホームヘルパーは利用者と家族の伴走者です。ご家族が困った、ちよつと助けてほしいと思つた時に寄り添えるのがヘルパーだと思います。
原田 介護現場における石川県ならではの課題というものはありますか。

鍋谷晴子氏



鍋谷 気候の関係で、洗濯物が乾きにくいこと。あと、衣類に限りますが、においを気にする家庭が多いようです。

藤井 介護されているご家庭を訪問しますと、ちよつと失敗した衣類を袋に詰めて、洗濯機の横に置いておくことが多いですね。においが出ないよう、袋の口をしつかり締めて。こういうところでも、

原田 和角さんは介護する中で、助かったと感じたのはどんなことでしたか。
和角 最初のうちは、全部自分たちでやらなきゃと思つていました。一度、怒られたことがあつたんです。夜中に母の点滴が外れ、気兼ねしながら訪問看護師さんに電話したら、「気にしないでください。私たちが提案できることもたくさんあると思つています。まずは抱え込まないことです。誰もが介護が必要になり得ますから、周囲に気軽に頼れる環境が望ましい。私たちはそんな状況を支える製品を作つていきたいと考えています。」

藤井 介護は大変という話を聞きますが、頼りになるサービスや、私たちの立場から提案できることもたくさんあると思つています。まずは抱え込まないことです。誰もが介護が必要になり得ますから、周囲に気軽に頼れる環境が望ましい。私たちはそんな状況を支える製品を作つていきたいと考えています。



【基調講演】在宅介護の現状

皆さんは私たちホームヘルパーに、どんなイメージをお持ちですか？ 家に来てご飯を作ってくれ人、いろんなお手伝いしてくれ人、といった「何かをしてくれる人」というイメージが定着しているように感じています。

利用者の思いと「伴走」

「講師」鍋谷晴子氏

ヘルパーの本来の役割は、介護される方ご自身が、その人らしく生きざるのをお手伝いすることです。ですからご本人には、これからの人生をどう送っていききたいか、自分のこだわりは何なのか、と

「伴走」とは、ヘルパーが利用者さんの人生を共に歩むことです。利用者さんの思いや希望を聞き、それをサポートしてあげることが大切です。

人生を頑張るために

介護は突然始まつて、突然終わるものです。ある日、転倒して骨折し、動けなくなるかもしれません。その時から介護が始まるわけですが、でも、

折し、動けなくなるかもしれません。その時から介護が始まるわけですが、でも、

貴重な体験に感謝

介護とはある意味、人生の最期に立ち会う仕事です。それは重い、大変なことだというイメージをお持ちの方もいるでしょう。それでも私は、ご本人が自分らしく、人生を終える瞬間に居合わせたいだけのことには感謝しています。感謝してこの仕事をさせてください。その思いに伴走するのが私たちヘルパーです。



会場には、花王の介護関連製品が展示され、特徴の紹介が行われました

原田 幸子氏



和角 私は妻に任せきりだめだと、2人でやるよう心掛けました。すると私の兄弟も応援してくれ、母もにこにこしてくれました。そのうち孫も来て、笑顔が増えた。たくさんの方が会つてくれることで、認知症の人は活性化するとおもいます。本当に回復したかと思つてしまいました。